



## 宮地重遠先生を偲んで

都筑 幹夫

東京大学 名誉教授 宮地重遠先生は、2016年6月10日にお亡くなりになりました。享年86歳でした。

東京大学理学部をご卒業後、徳川生物学研究所、東京大学応用微生物研究所（応微研、現 分子細胞生物学研究所）で、主に微細藻類を用いて光合成炭素代謝調節の研究で多大な業績を上げられました。光合成研究会（現在 日本光合成学会）を立ち上げられ、国際交流の推進にも努力されました。ご自身の研究だけでなく、我が国における光合成分野の研究推進体制作りに多大の貢献をされたと思います。

光合成の炭素固定回路は、カルビン・ベンソン回路ともよばれますが、 $^{14}\text{C}$ が初めて用いられた研究として高校の教科書にも記載されています。日本でも光合成の研究は盛んでしたが、戦後国内で放射性同位元素（RI）を製造できず、研究に遅れをとってしまいました。

宮地先生は、米国 Scripps 海洋研究所の A.A. Benson 先生の下に留学され、日本に帰られた後も東大の応微研とアイソトープ総合センターでその研究を続けられました。 $^{14}\text{CO}_2$ をクロレラに取り込ませ、ペーパークロマトグラフィーにより $^{14}\text{C}$ の取り込まれた代謝産物を分析する方法で、照射された光色や温度、生育時の $\text{CO}_2$ 濃度の影響などを解析されておりました。とりわけアイソトープ総合センターでは一連の研究装置を設置され、センターを利用される農学部や理学部などの生物系研究者の便宜を図っておられました。1976年に Benson 先生をお呼びになりましたが、その時に Benson 先生からプレゼントされた炭素固定回路の発見当時の GM カウンターは、アイソトープ総合センターに寄贈されました（写真）。アメリカやドイツなど、外国人研究



写真 光合成炭素固定回路発見当時の GM カウンター  
（写真は白岩善博氏提供）

者との交流が多く、長期にわたり研究室に滞在される外国人研究者もおりました。

応微研の所長をされていた頃は、放射線取扱主任者の資格を重視され、若手研究者にその資格の取得を奨励されました。こうして資格を得た若手研究者の多くは、種々の教育研究機関に広がっています。

日本アイソトープ協会ライフサイエンス部会では常任委員会の副部長（1982年6月～1992年5月）、部長（1992年6月～2002年5月）を歴任されました。この間企画専門委員会委員長も務められました（1991年6月～1994年5月）。また、本誌500号記念座談会で司会もされております。ちょうど $^{32}\text{P}$ を用いた遺伝子解析が盛んに行われ、多くの生物系研究者が RI を利用しようとして課題が山積された時期でした。部会の名称も農学生物学部会からライフサイエンス部会に変更された時でもあります。ライフサイエンス研究の発展に不可欠だった放射線利用に大きな貢献をされたと言っても過言ではないと思います。

東京大学を離れられてからは、(株)海洋バイオテクノロジー研究所の総合研究所長として、また、マリンバイオテクノロジー学会創設者として、海へ研究の対象を広げられました。晩年、自らのウェブページ (<http://www.miyachishigeto.com/>) を開設され、先生のお考えや思い出が述べられています。研究を楽しみ、お酒と会話を楽しむ先生でした。

宮地重遠先生のご遺徳を偲び、哀悼の意を表します。

（東京薬科大学）